

<原著> 第49回 日本赤十字社医学会総会 優秀演題

自家製プール血清による生化学項目の精度管理—プール血清作製法—

静岡赤十字病院 検査部

宇賀田 章乃 山口 孝一 川口 貴子 赤坂 寿美子 大畑 雅彦

**The method of our own conserved serum
—For the quality control of biochemical items—**Fumino UGATA, Koichi YAMAGUCHI, Takako KAWAGUCHI,
Sumiko AKASAKA and Masahiko OHATA

Department of Clinical Laboratory, Japanese Red Cross Shizuoka Hospital

要 旨：臨床検査の精度管理における管理試料は、一般的には各メーカーが販売するコントロール血清が繁用されている。当院検査部は、自家製プール血清で精度管理に臨床的許容範囲を用いた運用を施行している。作製当初、特に異常域プールの濃度調整に苦慮していた。廃棄処分検体から、正常域濃度プールは健診者の検体を、また異常域濃度プールは極異常値検体（特にビリルビン陽性検体）を抽出し二濃度の値付けを行った。凍結保存には -80°C フリーザーを使用し、CV値の小さい安定したプール血清の作製を試みた。

Key Words：自家製プール血清、簡便な精度管理、 -80°C 保存

はじめに

当院検査部では、始業時の業務を簡素化する目的で¹⁾、自家製プール血清（以下プール血清）による精度管理に臨床的許容範囲^{2~4)}を用いた運用を行っている。プール血清は、生化学大型分析機器で分析される全項目（正常域と異常域の二濃度）を測定し、始業時の業務効率化に大変有用である。プール血清は古くから精密度（precision）の管理として用いられているが^{5,6,8)}、篠原、澤部らの報告を参考にプール血清の作製を行っていた。特に異常域プールの調整は煩雑であり、またフィブリン析出等によるデータのバラツキが問題であった。プール血清の作製にはパニック値の検体を収集するなど試行錯誤を繰り返し、多くの時間と手間を要していた。過去にはプール血清を作製利用していた検査室も多く^{5~9)}、

それらを参考に作製を行った。前述の問題点を解消する為に、作製の効率化とデータの安定性が課題であった。

今回我々は、プール血清の貯蔵法の工夫と希釈濃度予測調整法を試み、安定したプール血清作製法を考案したので報告をする。

対 象

対象は、当院の測定項目（生化学38項目 免疫9項目）を測定する正常域濃度プール血清（以下ノーマルプール）と異常域濃度プール血清（以下アブノーマルプール）とした。測定機器は日本電子BioMajestyJCA-BM6070（以下BM）を用いた。

方 法

保存条件

当院倫理委員会で承諾を得た廃棄処分患者